



希望の

ひかり

第25回

市が東北誘致に取り組んでいる「国際リニアコライダー（以下、「ILC計画」）について最新情報をお届けします

市は、ILC誘致の実現を見据えたまちづくりに向け、先進事例となるアメリカやカナダの大学、研究所などを視察しました。今回は、この視察や市が11月24日に開催したILC特別講座などの様子をお知らせします。

キャンパス中心の「まちづくり」を視察

市は、10月26日から11月2日にかけて、東北大学の研究者など同行し、カナダのブリティッシュコロンビア大学やアメリカのスタンフォード大学、SLAC国立加速器研究所などを視察。ILCキャンパスデザインを検討に向けて、先進的なまちづくりの手法などを学びました。

視察先の大学キャンパスは、自然景観を生かして建設され、再生可能エネルギーを活用した運営を行っています。北上サイトにおいても、この自然共生型の手法をぜひ取り入れ



多くの人々でにぎわうキャンパス

たいと感じました。また、学習・研究施設を中心にまちが形成され、キャンパス内には、学生や研究者だけでなく、大学で働く人々も数多く居住。キャンパスを中心とした新たな「まちづくり」の可能性を垣間見ることができました。

キャンパス内には、研究者やその家族に対するサポート機関が設置され、生活上のさまざまな相談に対応しています。海外の研究者も「便利のところに住みたい」「おいしいものを食べたい」というニーズは私たちと同じ。住居地と研究所との交通の利便性や外国人が気軽に利用できる店舗の充実など、快適な住居環境整備が必要と強く感じました。

欧米では、買い物をする際にカードを利用するのが一般的で、日常においては、英語を使用します。英会話は、すぐに身に付くものではありませんが、私たちが、積極的に学んでいく姿勢が求められるのではないのでしょうか。

地域住民も意識の変化が現れる

市は、ドイツ・マインツ大



聴講者に語り掛ける齋藤教授

学の齋藤武彦教授によるILC特別講座を11月24日、奥州宇宙遊学館で開催しました。会場に詰め掛けた約50人の市民は、齋藤教授の「国際的なまちづくりに必要なこと」と題した講演に耳を傾けました。齋藤教授は、ドイツ・ダルムシュタットの1地区であるヴィックスハウゼンの事例を挙げ、国際協力による加速器の建設でまちが大きく変化したことを紹介。「建設当初、地域住民は英語を話せなかったが、5年もたつと簡単な会話ができるようになった。住民の意識が変化し、今では外国人を外国人と思わない感覚がある」とまちの国際化が進

んだことを解説しました。外国人の受け入れについては「地域住民が楽しみながら、リラックスして迎え入れることが大事」と訴えました。

ILCに興味を抱く子どもたち

昨年に続き、第3回「おらが地区センターまつり」のILC特別企画展が11月3日、4日の2日間、水沢地区センターで開催されました。

初日は、高エネルギー加速器研究機構（KEK）の藤本順平理学博士が講師となり、水沢中学校科学部の生徒と共に、ILCに関する実験教室を開催。生徒と一緒に、来場者へ実験の仕組みを詳しく説明していました。



子どもたちは藤本理学博士の話しに興味津々

本コーナーでは、ILC計画について皆さんからの質問にお答えします。電子メール、ファクスでお気軽に質問ください。お問い合わせ先：本庁政策企画課ILC推進室（内線412・415、FAX 02533・3333、i@city.oshu.wate.jp）